

第3回トレニックワールド in 越生完走記

No.1220 小澤 晃一

トレイルランニング

「何のために走るのか？」激しい鼓動と荒い息遣い。痛みと苦しさでつい考えてしまう。

豪雨の中のスタートから、3時間が経過した。午前中の秋雨の影響をうけた、ぬかるむ急峻を登る。一步一步脚を繰り出すたびに脛とふくらはぎの筋肉の線維がきりきりとちぎれそうだ。今はトレニックワールド in 越生30kというトレイルランニングの大会中だ。簡単にいえば山を走るマラソンだ。ただマラソンと違うのは、道がオフロードで標高差が千メートルぐらいあるということだ。200人ぐらいが同時にスタートしたレースでも、後半20kを過ぎると前後に全く人気を感じない時間がある。今がその時間だ。

そう、何のために走るのか？

自分のために走る。自分のためだけに使う極上の時間。家族や子供のためでなく、お客さんのためでなく、ましては国や世界のためでなく、ただ自分の楽しみだけに使う時間。一流のシェフが腕を振るった料理よりも、三ツ星ホテルの最上階に泊まるよりも豪華だ。走ることは、動的な禅だという人もいる。人が走ることに精神的成長を求めたとしても、それはそれでいい。しかし私にとって走ることは、ただ面白いから。基本遊びだ。遊びだから、誰からも強要されず、束縛もうけない。「健康のために、スタミナをつけるため、走るんです。」そんなのは、みんな方便だ。実は遊びを邪魔されないために、心行くまで楽しむための大人の方便なのだ。

激しい水音が聞こえてくる。普段は小さなせせらぎであるはずの沢が、今は増水し岩をけずる流れとなっている。そこを足首まで水につかりながら渡る。撥水性を高めたゴアテックスのシューズにも、水が容赦なく入り込んで足を重くする。

しかしいつから、世のため人のために、生きるようになったのだろうか？大人になって、生活のためにお給料をもらうようになってからかな。じゃあ、世のため人のためなんて思うよりも、自分の楽しみのために、とまっているほうが意外と謙虚なのかもしれないな。

ふっと視界が開ける。どうやら山頂に着いたようだ。目前に雨上がりの山々がある。流れるモヤが山々にかかりなんと幻想的だ。

山は、冒険小説を読むのと似ているのかもしれない。冒険小説は数多く存在するが、そのストーリーの骨格は恐ろしいほど同じだ。物語の中で主人公は旅に出る。そして仲間に出会い、力を合わせて敵をやっつけ、目的を遂げる。そして帰還するのだ。山ではまず、山道に入っていく。これは旅に出る、未知の世界に入っていくこと、そして、登り道で苦勞、困難を味合う。そして動物や植物、気候により変わる風景、うだるような暑さや冷たい雨、そこではいろいろな出会いがある。そして山頂まじかになると、最後の戦いだ。力をふりしぼり山頂に立ったときの達成感は、格別だ。そして山を降りる。その降りた先には、おいしいビールや温泉が待っている、なんて具合だ。

山頂からは、いきなり細い山道を駆け下りていく。ぬかるむ急斜面。瞬間的に着地する場所を見つけながら加速する。小さいステップ、大きいステップ、両手は力を抜きバランスを取る。舞を舞うような感じだ。一瞬だけ重力から開放される。そして駆けながら、手袋をはめようとしたときだ。一瞬足元の注意がそれる。足元が濡れた岩肌に乗られた。視界が横倒しになる。転倒する寸前に左手が反応した。手首から衝撃が頭まで響く。ゆっくり立ち上がって左手首を回す。大丈夫、折れてはいない。

最後のエイド（マラソンでいう給水所）に着く。先に着いていたランナーが数人いる。コーラやスポーツドリンクのほかに、バナナやお稲荷さんもある。スタッフに感謝、感謝。今日、山やランナーやスタッフからもらったエネルギーは自分を通じて、縁ある人に流れていくはずだ。降った雨が山から流れていくように。ランナーがまた一人エイドを後にしていく。さあ残り4k。そろそろ私も行きますか。